

青丘文庫 月報 No.114

1997年1月1日発行

＜発行人＞ 〒654 神戸市須磨区須磨寺町4-3-1 メゾン・ド・青丘内 青丘文庫
韓 哲 暁 TEL/FAX 078-735-0220
＜編集人＞ 〒657 神戸市灘区山田町3-1-1 (財)神戸学生青年センター内
飛田 雄一 TEL 078-851-2760 FAX 078-821-5878

【巻頭エッセー】

「従軍慰安婦」問題をめぐる最近の議論について

藤永 壮



最近「従軍慰安婦の強制連行はなかった」という主張が、マスコミを賑わせている。キャンペーンの中心人物は、かねてより「自由主義史観」なるものを唱え、南京大虐殺を事実と認めないなど「自虐的な歴史観」を「批判」してきた藤岡信勝氏であるが、彼の「慰安婦」に対する「強制連行なし」説は、主として歴史学者・秦郁彦氏の見解に依拠したものである。そしてとくに若い層に影響をもつマンガ家・小林よしのり氏が「新ゴーマニズム宣言」（隔週誌『SAPIO』連載中）で、藤岡氏らの主張に沿う形でこの問題を取り上げてから、議論は一挙に過熱化した感がある。

彼らの主張をここで詳細には紹介できないが、要するに軍が直接、暴力をもって「慰安婦」を連行していった証拠はない、というのが「強制連行なし」説のポイントである。藤岡氏は言う。「問題が大きくなったのは、社会主義体制の崩壊によって未来を語れなくなった左翼が、自分たちの生き残りをかけて日本の過去を糾弾することに全面転換し、そのための格好の材料として慰安婦問題を『発見』したことによる。慰安婦問題は日本人がすべてお膳立てして始まったのであり、補償金をチラつかせたり、日本への怨念をあおり立てたりするという手段で隣国に移植された日本起源の反日運動なのである」と（『SAPIO』1996年12月11日号）。

このような乱暴な議論に、はらわたの煮えくり返る思いをされている方も多いと思う（私もその一人である）。彼らの主張にしばしば登場するキーワードが、「左翼」と「反日的日本人」（その他「反日主義者」など「反日」を冠した語）であるが、前者を「アカ」、後者を「非国民」と言い換えれば、戦前の思想弾圧に使われたレトリックとほとんど変わるところのない論法なのである。

藤岡氏らは、明らかに「強制連行」の意味を矮小化して使用している。慰安所経営者が（しばしば周旋業者を通じて）詐偽などの手段で女性たちを戦場に連れ出しても、それは軍による「強制連行」には当たらないという（慰安所は軍の管理下にあったにも拘わらず）。また当時の朝鮮の状況では、警察による

渡航証明書の発行など、植民地権力の協力がなければ女性を朝鮮外に連れ出せなかったはずなのに、その点は不問にし、国家権力の責任を総体として把握する視点を意識的に欠落させている。あくまでも軍による直接的・暴力的な「強制連行」に論点をしぼって、一点突破をはかる構えなのである。

彼らは国家と市民（あるいは民衆）の戦争責任を同一視し、あたかも「慰安婦」に対する強制性を認めれば「日本人」全体が傷つくような論陣を張っている。日本国籍をもっている者が「国民」として国家の構成要素であることは認めるにしても、個々の「日本人」の利益が、つねに「国益」と一致するなどということはあり得ない。国家権力と緊張・対立関係にある、言わば「市民」

「民衆」としての尊厳は、むしろ国家権力を監視し、その暴走をくい止め、またその過ちを正すことによって守られるはずである。「強制連行なし」説の分析を通じ、朝鮮植民地支配に対する「日本」の責任をどう捉えるか、私なりにもう一度、自分の考えを整理してみる必要を感じているところである。

なお藤岡氏らの主張に対する反論は、すでに上杉聰氏 (<http://www.jca.or.jp/JWRC/news/shokoi.html>) や、吉見義明氏（教科書検定訴訟を支援する全国連絡会編『教科書から消せない歴史の真実』青木書店）などによって展開されている。詳細はそちらを参照していただきたい。また1月10日深夜のテレビ朝日「異議あり」で、小林氏と彼に抗議した市民団体の方々との討論が行われるようなので、これにも注目しておきたい。

※ 私の勤務先の図書館で、斎藤実記念館（水沢市）所蔵「斎藤実文書」のマイクロフィルムを購入しました。関心がおありの方はご連絡下さい。

(E-mail/funtak@las.osaka-sandai.ac.jp)。

【第185回 在日朝鮮人史研究関西西部会／1996年12月15日（日）】

報告者 杉尾 波美子 氏

テーマ 「1930年代の神戸市林田区における在日朝鮮人の生活」

(※ 記録は省略)



《神戸学生青年センター出版部の新刊です》

鄭鴻永『歌劇の街のもうひとつの歴史』

一宝塚と朝鮮人』

1997年1月刊/A5 265頁 1854 1854円

注文は、2110円(送料共)を下記郵便振替へ。

<01160-6-1083 財団法人神戸学生青年センター>

【第157回 朝鮮民族運動史研究会 / 1996年12月15日(日)】
苦学生同友会について

金基旺



植民地時期の朝鮮民族解放運動史において在日朝鮮留学生運動は非常に重要な役割を果たした。特に、1920年代に入って急増し、全体留学生の三分の一を占める苦学生は、当時の朝鮮人としては最高の教育を受ける留学生＝インテリと在日朝鮮人の大多数を占める労働者＝一般民衆との中間的立場に位置しており、彼らの動向は注目されるものである。

苦学生団体の先駆けとなったのは1917年1月に成立した「東京労働同志会」である。苦学生と労働者の相扶相助を目的として洪承魯の発起によって成立した労働同志会は、労働者中心の親睦団体であったが、活動不振によって自然消滅した。本格的な苦学生団体は1920年1月25日李起東、韓潤東、洪承魯などに発起によって創立された「朝鮮苦学生同友会」である。苦学生同友会は「朝鮮苦学生及労働者ノ指導誘掖ニ努メ相互ノ親睦ヲ図ル」ことを目的とし、具体的な事業内容として講習会開催、各地方に支部設置および巡回講演、無料治療、寄宿舎設置、職業紹介、進学指導、雑誌発行などを掲げた。

苦学生同友会の活動は主に苦学生たちが労働者を指導する形で行われた。講演会、雄弁会を開催する一方、「槿城学校」という夜学校を設置して労働者に対する教育運動を行い、民族意識の高揚と社会主義思想の普及に努めた。また、労働運動の一環としてメーデーに参加して日本の社会運動との連帯を図った。苦学生同友会の活動の中で注目すべき点は、1922年2月4日幹部たちが帰郷して『朝鮮日報』紙上に広告として発表した「同友会宣言」である。朝鮮最初の階級闘争宣言として知られる同友会宣言は、朝鮮民族運動の活性化と社会主義運動の発展に大きく寄与した。

無政府主義者、共産主義者そして親日派までもが思想的未分化の状態と一緒に活動した苦学生同友会は、無政府主義団体(黒涛会、21.11→黒友会、22.11)、共産主義団体(北風会、22.11)、親日団体(相求会、21.12→相愛会)を産む結果となり、以降の在日朝鮮人運動における思想運動・労働運動の母体としての役割を果たし、全体民族解放運動にある程度貢献したと言える。

【前号の巻頭エッセー「インターネットと朝鮮研究・体験的雑談(水野直樹)」の追加です】

前号に書いた文章で、朝鮮研究に利用できるインターネットのホームページをいくつか紹介したが、その後、韓国の弘益大学歴史教育学科で運営されている歴史研究文献の検索サイトを知った。韓国で書かれた歴史論文などをキーワードで検索することができる。最近5年間ほどのものがデータベース化されているようで、なかなか便利なものである。アドレスはつぎのとおり。

The Korean Historical Connection <http://wow.hongik.ac.kr/~khc>

(水野直樹/E-mail mizna@zinbun.kyoto-u.ac.jp)

シンポジウム「1980年光州事件と韓国キリスト教」が開かれました

講演 牧園大学教授(韓国大田) 金興洙氏(通訳 徐正敏氏)

討論 延世大講師 徐正敏氏/西江大講師 崔起榮氏/水原大講師 韓圭茂氏

日時 1997年1月6日(月)午後4時~6時

会場 神戸学生青年センター

主催 日韓キリスト教関係史研究会(青丘文庫)

韓国キリスト教史研究所(ソウル)

※ 金興洙氏は『韓国基督教と歴史 第5号』(1996年9月、韓国キリスト教史研究所)に、「5月光州抗争に対するキリスト者の宗教的反応」という論文を発表されています。日韓キリスト教関係史研究会で、翻訳してパンフレットにする予定です。

研究会のご案内

第158回 朝鮮民族運動史研究会

1997年1月12日(日)午後1時30分

報告者 鹿嶋 節子氏

テーマ 「朝鮮義勇隊の工作活動」

第185回 在日朝鮮人史研究関西西部会

1997年1月12日(日)午後3時30分

報告者 堀内 稔氏

テーマ 「神戸・灘の製ビン業と朝鮮人」



- 阪急六甲より徒歩2分
- JR六甲道より徒歩10分
- 新幹線新神戸よりタクシー15分

会場は、いずれも神戸学生青年センター(地図参照)

(阪急六甲下車、北東徒歩2分、Tel (078)851-2760)

今後「研究会」の予定

97年2月16日(日) 金 英 達(在日) 藤永 壮(民族)

『月報』巻頭エッセーの予定(原稿〆切は、前月の25日です)

97年2月号(高木伸夫) 3月号(浅井良純) 4月号(堀内 稔)

5月号(飛田雄一)



(※ 編集長・飛田雄一の E-mail は、MXI01010@niftyserve.or.jp です。)